

プレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」
「祈り」プロジェクト 第一回ワークショップ報告書

開催日時：2013 年 7 月 31 日（水）

会 場 ：1C303 会議室

参加人数：30 名(教員 15 名、大学院生等 15 名)

「祈り」プロジェクト概要説明

小松建男教授（人文社会系・中国文学）より、プレ戦略イニシアティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」における事業の一環として、「祈り」というテーマを巡って、拠点形成の方向づけを目指すという、「祈り」プロジェクトについての趣旨説明が行われた。その上で、本ワークショップの発表者が紹介された。



小松建男教授による概要説明



概要説明の様子

【第一セッション】仏教と「祈り」

第一セッションでは、佐久間秀範教授（人文社会系・仏教学）により、仏教学の視点から捉えた「祈り」が紹介され、本プロジェクトへの提案が行われた。

一般に「祈り」という言葉は、願う対象に心を向ける行為である。仏教における「祈り」を考察するにあたって、原理原則の教義と民衆の求めるものとの幅広い範囲で「祈り」を捉える必要がある。仏教における基本的な「祈り」とは、帰依するという行為である。出家者はブッダに成ることを目指し、本尊である涅槃の境地、釈尊、ブッダ等に帰依する。これは混じりけのない心を一点に集中させる行為であり、祈りの原点かつ仏教の修行法の基本である。一方、民衆は僧侶の体を洗ったり食事を提供したりして、その功德に預かろうとする。民衆は日々の修行に明け暮れることができないため、超人的な能力を具えた修行者等に帰依し、その力で願いを叶えてもらうために祈るのである。

さて、仏教で祈る対象としては、仏塔や仏像も挙げることができる。もともと仏教では仏像を造ることを禁じていたため、仏塔が祈りの対象となっていた。しかし、そこに描かれるレリーフは時代を経るにつれ象徴型のものから仏像へと変わっていく。中でも多くの礼拝者が弥勒菩薩と観音菩薩の像に救いを求めている。

さらに、仏教における祈りの位置付けは多様である。本来的にヨーガ行である念仏（仏を念ずる）は変容し、特に称名念仏を主とする浄土真宗では、「現世をいのる」手段としての「祈り」を否定している。また本来、出家者は葬儀に関わらないものであるが、現実的には避けることができない。親しい者の死に際し、そこに心に向けて「祈る」行為は、人類の基本的な心の動きであるからであろう。

以上のような発表を受けて、ディスカッションが行われた。ディスカッションでは、「祈り」に見られる「心」（＝精神的な側面）と「行動」の関係性の問題、西欧哲学の視点からみた場合の「祈り」における主体／没主体の問題や、親鸞の念仏など、日本の仏教と「祈り」のあり方の問題など、「祈り」の諸相を巡る様々な視点からの議論が行われた。



佐久間秀範教授の発表



ディスカッションの様子

【第二セッション】言語文化と「祈り」

第二セッションは、まず小松建男教授（人文社会系・中国文学）が中国文学に見る「いのり」について、「祈」「禱」「祝」の意味と用例から論じた。『説文解字』によれば、「祝」は本来鬼神に言葉を告げるという行為を担当する官員のことを指す。ここから「祝」が鬼神に言葉を告げるという行為にも使われる。「祈」「禱」は、本来は鬼神に言葉を告げて「福」を求める行為なので、「祈」「禱」は「祝」という行為の下位区分とも言える。

文章の類別としては、曾国藩が『經史百家雜鈔』において、「祝文」を「祭文」「吊文」「哀辭」「誄」「告祭」「祝文」「願文」「呼魂」とともに「哀祭類」（「人が鬼神に告げる文章」）に属するものとしている。このうち「願文」、あるいは日本では一般的な「祈願」「祈念」は仏教関係の文書以外で見かけることがほとんどない。「願」は人に向かって念じるものであるためと思われる。

「いのり」という行為について、近世口語小説の中から用例を搜すと、おもに「祝」が用いられている。それは声に出して行われることもあれば、声に出さずに行われる例もある。なおこの点について、聴衆からは「中国語では声に出さない『祈』は少ないのではないか」という意見も出された。



第二セッションの様子

次に、矢澤真人教授（人文社会系・日本語学）による日本語と文化の関係から見た「祈り」の分析が発表された（沼田善子教授による代読）。第一に、「いのる」の語源は「のる」、すなわち神聖な形でことばを発することである。具体的には、言葉を口に出して神仏に請い願うことであり、人を呪う（のろふ）ことも、希望・願いを言うことも「いのる」ことになる。第二に、「いのり」を日常的な挨拶という視点で考えたとき、日本語の挨拶は相手への直接詠え型（「お元気で」）を用い、神仏を介した間接的な詠え型（「God be with ye: good-by e」）は少ない。第三に、「祈る」と「祝う」の違いについて、未来の良いことは「祈る」ものであり、過去の良いことは「祝う」ものである。つまり時間の方向性が異なる。最後に、「祈る」と「願う」の違いについて、「挙手を願う、助けを願う」のように相手の動作を伴うものは「願う」ことはできるが、「祈る」ことはしにくい。さらに、「彼が失敗するように祈った」のような引用文では良くないことも祈れるが、「彼の失敗を祈った」のような名詞句では良くないことを祈りにくい。

日本語学の観点から見て、注目される現象は、以下の2点である。第一に、コーパス調査により、「～と」で受ける引用節（内容節）は、「願う」では「～てほしい」「～たい」のような感情型が7割を越えるのに対し、「祈る」では「～ください」「～ように」のような詠え型が7割を越えており、モダリティ上の差違が明確に認められることである。第二に、「願う」は、「彼の願いは世界が平和になることです」のような抽象名詞主題文が作りやすいが、「祈る」は「彼の祈りは世界が平和になることです」のような文は作りにくい。総じて発話動詞は抽象名詞主題文が作りにくい傾向がある。

以上のような分析を通じ、「祈り」の使用場面について様々な議論が行われた。